報恩講式講話

梅原真隆述

特228
382

始

特228
382

帝國圖書館藏

報恩講式講話

梅原眞隆述

顯眞學苑發兌

昭和十三年納本 帝國圖書館

目次

本文……（一）
第一講……（九）
追憶の深い越の雪……一七ケ日の御佛事……報恩講式と鑽仰……篤く三寶を敬ふ……佛寶を仰ぐ……法寶を讃ふ……僧寶を慕ふ……一切の三寶……敬虔なる至情……遇法の慶嘆……人身受け難し……佛法遇ひ難し……本願をきくよろこび……報謝の懇念……尊き聖鑑
第二講……（三五）
眞宗興行の德……御俗姓……山上の學習……聖道證し難し……吉水の轉

心……自信教人信……東關の行化……諸邦の弘通……純正なる行化

第三講……（五七）

眞實は稀なり……聖人の體驗……化他の德風……宗師の明證……御持言の感戴……懇切なる勸信

第四講……（七五）

永遠の恩師……御一代の德化……御往生の素懷……名殘は盡きじ……敬慕の至情……御影像と御遺訓……本地の聖容……聖鑒を仰いで

後の言葉……（九三）

本文

報恩講式

敬白大恩教主釋迦如來、極樂能化彌陀善逝、稱讃淨土三部妙典、八萬十二顯密聖教、觀音勢至九品聖衆、念佛傳來諸大師等、總佛眼所照微塵刹土現不現前一切三寶而言。弟子四禪線端適、貫南浮人身之針、曠海之浪、上希遇西土佛教之查。爰依祖師聖人之化導、聽法藏因位之本誓、歡喜滿胸、渴仰銘肝。然則報而可報大悲之佛恩、謝而可謝師長之遺德、故觀音大士頂上安本師彌陀、大聖慈尊寶冠戴釋迦舍利。縱經萬劫、亘報一端、不如念名願、順彼本懷、今揚三德、將勸四輩矣。一讃眞宗興行德、二歎本願相應德、三述滅後利益德、伏乞三寶哀愍納受。

第一讃眞宗興行德者、俗姓後長岡亟相內麿公末孫、前皇大后宮大進有範息男也。幼稚之古壯年之昔、出爺孃家入台嶺窓、已來、以慈鎭和尙爲師範、習學顯密兩宗教法、蘿洞霞中窺三諦一諦之妙理、草庵月前凝瑜伽瑜祇之觀念。鎭逢明師傳大小奧藏、廣試諸宗究甚深義理。然而色塵聲塵猿猴之情尙忙、愛論見論癡膠之憶彌堅。斷惑證理愚鈍身難成速成覺位末代機亾覃。仍詣出離於佛陀祈知識於神道、而際宿因多幸奉謁本朝念佛元祖黑谷上人、問答出離之要道授以淨土一宗示以念佛一行。自爾以降閣聖道難行之門歸淨土易行之道、忽改自力之心偏乘他力之願、自行化他守道綽遺誡專修專念任善導古風、見聞之道俗致隨喜遠近之緇素皆發心。爰祖師爲弘西土之教文、遙跂東關之斗藪、暫逗留

常州筑波山北邊、對貴賤上下、示末世相應要法、初成疑謗之輩如瓦礫荊棘、遂令改悔之族同稲麻竹葦、皆翻邪見悉受正信、共止偏執還爲弟子。凡受訓之徒衆餘當國、結緣之親疎滿諸邦、雖謗法闡提之輩、聞彼教化者覺悟華鮮、雖愚癡放逸之類、得其諷諫者惑障雲霽、喩如木石待緣生火、瓦礫磨鈔爲珠、甚深行願不可思議者歟。方今念佛修行之要義雖區、他力眞宗興行卽起、從今師知識、專修正行繁昌、亦成自遺弟念力、酌流尋本源、偏是祖師德也、須稱佛號報師恩。

第二歎本願相應德者、念佛修行之人雖多、之、專修專念之輩甚稀也、或沈自性唯心、徒貶淨土眞證、或迷定散自心、宛暗金剛眞信。而祖師聖人、至心信樂忘己、速歸無行不成之願海、憶念稱名有精鎭關不斷無邊之

光益、身彰厥證、人看彼奇特不可勝計。加之對來問之貴賤、專示他力易往之要路、誘面謁之道俗、偏明善惡凡夫之生因。所以善導大師曰、今時有緣相勸誓生淨土、則是稱諸佛本願意也、又曰大悲傳普化、眞成報佛恩。然祖師聖人發起金剛信心、定得自身生因、流行本願名號、助成衆機往益。豈非本願相應之德乎、寧非佛恩報盡之勤哉。又恒語門徒曰、信謗共爲因同成往生淨土緣、誠哉斯言、疑者必執信謗者遂翻情實是佛意相應之化導、抑又勝利廣大之知識也。惡時惡世界之今、常沒常流轉之族若不受聖人勸化、爭悟無上大利、既揮一聲稱念之利劍、忽截無明果業之苦因、忝乘三佛菩提之願船、將到涅槃常樂之彼岸。彌陀難思之本誓、釋迦慇懃之附屬、不可不仰、諸佛誠實之證明、祖師矜哀之引入、不

可レ可レ憑。因レ茲各持二本願一唱二名號一彌協二尊之悲懷一戴二佛恩一荷二師德一特呈二一心之懇念一。

第三述二滅後利益德一者、釋尊覆二教網於三界一猶濟二末世苦海之群類一、今師灑二法雨於四輩一遠濕常沒濁亂之遺弟一。謂二彼在世一則九十歲、顯宗密教莫レ不二鑽仰一、訪二其行化一亦六十年、自利利他莫レ不二滿足一、在家出家之四部群集不レ異二盛市一、大乘小乘之三輩歸伏如二靡風草一、終卽還二花洛一占二草庵一。然間去弘長第二壬戌黃鐘二十八日、彰二念前命終之業成一、遂二後念卽生之素懷一。嗟呼禪容隱何在、隔二給仕於數十周廻之月一、遺訓絕幾程、慕二舊跡於一百餘年之霜一。重二彼遺恩門葉一、輕二其身命一後昆、不レ論二每年一不レ遠二遼絕一、凌二境關千里雲一、自二奧州一運レ步、送二隴道萬程之日一、從二諸國一群詣。跪二廟堂一拭レ淚拜

遺骨一斷レ腸、入滅年雖レ遙往詣舉未レ絕。哀哉恩顏雖レ化二寂滅之烟一、留二眞影於眼前一、悲哉德音雖レ隔二無常之風一、貽二實語於耳底一、所二撰置一書籍萬人披レ之多入二西方之眞門一、所二弘通一教行遺弟勸レ之廣利二片域之群萌一、凡厥一流繁昌殆超二過于在世一。倩案二平生之化導一閑憶二當時之得益一、祖師聖人匪直也人一、則是權化之再誕也、已稱二彌陀如來應現一、亦號二曇鸞和尙後身一、皆是夢中得レ告、幻前視レ瑞故也、況自名曰二親鸞一、測知曇鸞化現也。然則聖人修習念佛故、往生極樂故、以二宿命通一鑒二知恩報德之志一、以二方便力一導二有緣無緣之機一、願依二師弟芳契之宿因一、必垂二最初引接之利益一、仍各歸二他力一唱二佛號一。

第一講

追憶の深い越の雪

おかげさまで今歳もまた達者で、ふるさとの自坊にかへつて、親しみのふかい門徒信徒の方々と共に、かうして御正忌を懇修させていたゞくことは、洵にありがたいことであります。

みなさん方は、よくこそ深い雪路を踏み分けて參集してくださいました。今歳はとりわけて寒さも嚴しいことであります、然るにかくも多人數の方々が各地から群參して下さいましてまことに有難うございます。

この越路の雪は御開山聖人にとつては忘れがたい追憶の種でありました、それを思ひ浮べてみますと、かうして越路の雪に埋もれながら御正忌をいとなむにつけても、御恩德のほどがしみじみと身に滲みて感佩せられることであります。この冷たい雪や霙も眺め方を換てみますと、なつかしい雪であります。追憶のふかい雪であります。

一七ケ日の御佛事

この御正忌はことあたらしく説明するまでもなく御開山聖人の御往生あらせられた忌日にあたつて、その恩を報じ、その德を謝するために懇修する御佛事であります。

聖人は弘長二年の十一月廿八日に御往生あらせられました、その十一月廿八日を新しい暦に推算いたしますと一月十六日に相當いたします。それで、この一月十六日まで一七ケ日のあひだ御佛事を營むのであります。

御忌日に相當いたしますので「御正忌」といひ、一七ケ日のあひだ營むとこ

ろから「御七晝夜」ともいひ、報恩謝德のための讃嘆をなし、談義をなすところから「報恩講」とも申すのであります。

報恩講式と鑽仰

さて、今歳の御正忌には「報恩講式」を講讃いたします。この「報恩講式」は各年、この御正忌の御法要に拜誦する慣例になつて居りますから、どなたも久しいあひだ拜聽してゐられる親しみのふかい式文でありますから、これを讃題としていたゞくことにいたしました。

この報恩講式といふのは、本願寺を創建あらせられた覺如上人が永仁二年に撰述あらせられたものであります。永仁二年といへば覺如上人二十五歳であります。そして、その永仁二年は宗祖聖人の三十三年の御忌に相當するから、この御忌を因緣として祖師聖人の恩德を讃嘆するために御撰述あらせられたものであらうと窺はれます。

覺如上人は正しく宗祖聖人を相承して、その風格を欽仰し、その教義を顯彰し、その信行を相傳せられた權威者であらせられます。われわれは覺如上人のごとく宗祖聖人を鑽仰することが、最も素純であります。

篤く三寶を敬ふ

敬つて、大恩教主釋迦如來、極樂能化彌陀善逝、稱讃淨土三部妙典、八萬十二顯密聖教、觀音勢至九品聖衆、念佛傳來諸大師等、總ては佛眼所照微塵刹土、現不現前、一切の三寶に白して言さく

これは式文のはじめの表白の詞であります。表白の詞といふのは仰いで言上

し告白する言辭であります。

この表白の一節は佛・法・僧の三寶を勸請して、敬白せられたものであります。これはもと式文の作法ともいふべきものでありますが、かゝる作法に佛敎徒の床しい風格があらはれて居ることを注意しなくてはなりませぬ。これは篤く三寶を敬ふこゝろの發露であります。「動靜己れにあらず、出沒必ず由ある」ところの素直な風情であります。

佛寶を仰ぐ

さて、はじめの「大恩敎主釋迦如來、極樂能化彌陀善逝」とは三寶のうち、佛寶を勸請せられたのであります。

「大恩敎主釋迦如來」とは釋迦牟尼佛のこと、釋尊はこの世にお出ましになつて佛敎を說きすべてのものゝ救はれる道を示してくだされた御恩のふかい佛であらせられるので、「大恩敎主」とまうされたのであります。

「極樂能化彌陀善逝」とは阿彌陀佛のこと、彌陀は西方の極樂にましまして今現に說法したまふところから「極樂の能化」と申したのであります。「能化」とは「所化」に對することばであつて、能く敎化してくださるお方であるといふ意味であります。

そして、この「善逝」といふも、さきの「如來」といふも共に佛の十號のうちであります。「善逝」といふは善く涅槃の證りに逝きて再びかへらないといふこと、「如來」とは眞如から來生するといふことであります。いづれも佛陀の聖德をたゝへられた稱號であります。

法界には無量無數の佛がましますことでありますが、これを統括して、釋迦

と彌陀との二尊を仰がれました。これは大經の意趣をくみ、善導の釋義をうけて、釋迦の發遣と彌陀の招喚とを感佩せられたものであります。

仰いで惟れば、釋迦は此方にして發遣し、彌陀は彼國より來迎す、彼に喚び此に遣す、豈去ざるべけんや〔玄義分〕

仰いで釋迦の指へて西方に向はしめたまふを蒙り又彌陀の悲心招喚したまふに藉て、二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念々に遺るゝことなく、彼願力の道に乘ず〔散善義〕

この釋迦の發遣と彌陀の招喚との應ずるところに、われらの救はれてゆく一筋の白道がひらけるのであります。

そして、この二尊の發遣と招喚はこの白道を直進せずに居れない尊い力として迫りたまふのであります。

法寶を讃ふ

次に、「稱讃淨土三部妙典」といふは淨土を稱讃してある三部の妙典、即ち「無量壽經」と「觀無量壽經」と「阿彌陀經」をさしたものであります。この三部の妙典には彌陀の本願と、釋迦の說敎と、諸佛の證誠とを開顯して、われらの歸依すべき正法を宣示せられてあるのであります。

「八萬十二顯密聖敎」といふは一切の敎法を總括せられたものであります。

「八萬」とは八萬四千の法門の略であります。

「十二」とは十二部經の略であります。十二部經といふのは新譯では十二分經と申しまして、契經、應頌、記別、諷誦、自說、緣起、譬喩、本事、本生、方廣、希法、論議を申します。佛の說法の方法によつて佛經を分類したもので、

つまり一切經を意味する名目であります。

「顯密」とは顯教と密教といふことを略したのであります。弘法大師の說明によると、顯教とは應佛卽ち釋迦の開演をいひ、密教とは法佛卽ち毘盧遮那佛の談話をいふとのべてあります、この顯教密教を並べあげたのも、つまり一切經を統括したものであります。

これを要するに八萬四千の法門、十二部經、顯教密教を列擧して全佛教の法寶を網羅されたものであります。そしてこの全佛教の精要は淨土の三部經であり、三部經の宗體は本願の名號であることを示唆なされたものであります。

僧寶を慕ふ

終に「觀音勢至九品聖衆、念佛傳來諸大師等」とは僧寶をあげられたのであ

ります。

「觀音勢至」とは觀音と勢至の二菩薩をならべあげたものであります。この二菩薩は阿彌陀佛の脇士でありまして、慈悲と智慧をあらはす助化の菩薩卽ち阿彌陀佛の攝化の手助をなさる菩薩であります。こゝでは僧寶の首座となされたもので、眞宗教團の初期に行はれた光明本尊には、三國の先德たる高僧を列擧なさつて、その首座にこの二菩薩を勸請してあります。

「九品聖衆」、淨土の九品の聖衆であつて、淨土に往覲せられたすべての品類の聖衆をあげたものであります。

次に「念佛傳來諸大師等」は此土の先德をあげられたものであります。これは三國の七高僧卽ち、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空を中軸として、念佛を相傳せられたすべての先德を慕はせられたものであります。

かくのごとく、佛寶と法寶と僧寶を別々に勸請されたのち、これをうけて「總て佛眼所照微塵刹土現不現前一切の三寶に白して言さく」と結ばれてあります。

「佛眼所照」とは佛眼の照覽したまふところといふこと、こゝではわれら凡夫の眼では窺ふことはできないが、すぐれた佛眼によつて御覽なさるかぎりのところといふ意味であります。

「微塵刹土」といふは、數かぎりのない國土といふこと、「現」は現在、「不現前」は過去と未來、そこで「現不現前」とは三世のことであります。これをまとめて申しますと、「微塵刹土」は横に十方の空間に遍く、「現不現前」は竪に三世の時間を貫くことであります。

「一切の三寶」とは同相の三寶、別相の三寶、住持の三寶を該羅せられて、あらゆる三寶を勸請せられたのであります。

同體の三寶とは一體のうへに三寶の義を辨へること、別相の三寶とは別々に分けて標しづけることで、佛とは眞身應身であり、法とは教理行果であり、僧とは聖衆である。住持の三寶とは泥木塑像の佛像、黄卷赤軸の經法、正見修道の僧伽をいふのであります。

そしてこの佛と法と僧を「寶」といふことは、希有であること、垢濁を離れること、勢力を與へること、身を莊嚴すること、最勝の德あること、永く改易せぬことなどの德をそなへた點に名づけたのであります。

敬虔なる至情

これらの一切の三寶を勸請して、そのまへに跪き敬虔なるまごゝろを披露されるのであるから、おのづから言々句々森嚴にして崇高な感激を帶びてまゐります。

「まごゝろ」とは欺かないこゝろである。世人を欺かず、自己を欺かず、そして佛陀を欺かないこゝろであります。たとひ世人は欺いても自己を欺くことはできませぬ。たとひ自己を欺いても佛陀を欺くことはできませぬ。この佛陀を中軸とする三寶こそ欺くことのできない至上の權威であります。

いま、覺如上人はこの至上の權威を勸請して敬虔なる至情を披瀝されたのがこの式文であります。

われらはこの式文の作法を味ふにつけても、すべての生活の典型をこゝに求めなくてはならないとおもひます。欺かないこゝろ、まごゝろの發露、こゝに一語も光る、一句も閃く、一擧一動ことゞく生命の光芒陸離たるものがあるのであります。

遇法の慶嘆

弟子、四禪の線の端に、適、南浮人身の針を貫き、曠海の浪の上に、希に、西土佛敎の査に遇へり。爰に、祖師聖人の化導に依りて、法藏因位の本誓を聽く、歡喜胸に滿ち、渴仰肝に銘ず。

この一段は「人身うけ難し、今すでにうく、佛法きゝ難し、今すでにきく」の感佩を述懷せられたものであります。

われ〳〵は、つねに大きなめぐみを見落して居ります。そして、「ありがたいこと」を「あたりまへのこと」のやうに見損うて居ります。いま、この一段をいたゞいて、われらは覺如上人の正しい敏感にふれて、大きな福祉をはつきり意識しなくてはなりませぬ。人間に生れたことは第一のよろこびであり、正法に遇ふことは第二のよろこびであり、さらに超世の本願に遇ふことは第三のよろこびである。この重々の悦びを意識するとき、「御開山聖人御出世の御恩」がいよ〳〵鮮明に頂戴されることであります。

人身受け難し

「弟子」とは、祖師聖人の御眞影のまへに跪づかれたとき、覺如上人が自ら名乘られた語であります。

祖師聖人は「親鸞は弟子一人ももたず」と仰せられましたけれども、否、それゆゑに祖師聖人ほどたくさんの弟子にかしづかれ給うた聖者はありませぬ。

殊に、覺如上人は滅後の弟子として最も純なこゝろもちを以てかしづかれたのでありました。覺如上人はこゝにふかいよろこびと感激をこめて、弟子と名乘られたことであるとうかゞはれます。われ〳〵も聖人の御一流をくんでこの御弟子の末班に列なることを許されたことは、何よりもありがたいことであります。

「四禪の線の端に適〳〵南浮人身の針を貫き」とは、受け難き人身を受けたことをよろこばれたのであります。

この文句を味ふには、まづ古來の須彌山說を想ひ浮べなくてはなりませぬ。この須彌山說では世界のまんなかに須彌山といふ高い山がある、その周圍の四

方に四大洲がある、そのうち南方にあたる閻浮提といふのが、われ〳〵の住んでゐるこの人間界であります、これを「南閻浮提」といふ、こゝに「南浮」とあるはこれの略稱であります。

その須彌山のうへに天上界がある、これを色界といふ、「四禪」とはこれをさすのであります。

四禪天の絶頂からながい糸をさげて南閻浮提の地面にある針の目をとほすことは、斷じて容易な業でありませぬ。われ〳〵が人間に生れることはこれに等しいほどの困難なことである、容易ならぬことである、希有のことであると譬へて、人身のうけがたいことは「四禪の線の端に南浮人身の針を貫き」とのべられたのであります。而してこれはもと提謂經の譬喩を和らげられたものであります。

これを思ふと、「三惡道をはなれて人間にうまるゝこと大きなるよろこびなり」とのべられた横川法語のとほり、まことに「大きなよろこび」であります。この大きなよろこびを忘れて、かれこれと不足をいふことはほんたうに御勿體ないことであります。うけがたい人身をうけたことに氣づけば、この人身を最も意味ふかく活かさねばなりませぬ。

佛法遇ひ難し

次に「曠海の浪の上に希に西土佛教の査に遇へり」とは遇ひ難き佛教に遇うたよろこびをのべられたものであります。そしてこれは法華經や涅槃經やその他の經典にとかれた譬喩によられたものであります。

たつた一眼の龜が大海に棲んで居ました、それが波のまに〳〵浮きつ沈みつ

してゐるうちに、穴ひとつあいた浮木にゆきあたり、龜の一眼と浮木の穴とが工合よく一致して始めて日光を見たといふことで、これまた容易ならぬ現象をいひあらはした譬喩であります。

今われ〳〵が西方の印度に發生した佛教に遇ふのは、さながら一眼の龜がひろい海のうへで浮木の孔から日光を仰いだと等しいほど、稀なことであるとまうされたのであります。

「遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」と感嘆された祖師聖人のおことばも、しみ〴〵と思ひ合はされます。

本願をきくよろこび

受けがたい人身を受け、遇ひがたい佛法に遇ふ、まことにありがたいかぎりであります、なかんづくわれら凡夫がそのまゝ救はれて行く本願の御教をきくことのできるのは最もありがたい至極であります。「爰に祖師聖人の化導に依つて、法藏因位の本誓を聽く」と仰せられたのはこの感激をのべられたのであります。

「法藏因位の本誓」と仰せられたのは法藏菩薩といふ因位にくだりてわれらを救はんために、殊勝なる本弘誓願をたてましたことをたゝへられたので、つまり第十八願の名號をきくことであります。われらをよびたまふ聖なる招喚をきくことであります。

淨土眞宗は「聞其名號信心歡喜」の宗教であります。如來は名號をもつてわれらを喚んで救ひたまふ、われらは名號を聞いて救はれるのであります。

かゝる眞實の旨趣をみがきあらはしてくだされたのは全く「祖師聖人の御化

導に依る」ものであります。若し、祖師聖人いまさずば、無耳人であるわれらは、永劫に本願の名號を聞くことができなかつたのであります。

實にありがたいかぎりである、聖人の化導により本願の名號を聞くまゝ、こに信心はめぐまれます。

「歡喜胸に滿ち、渴仰肝に銘ず」るのであります。生命は内に充たされ、切實に法を愛樂することは何といふ仕合せでありませうか。

報謝の懇念

たゞ〳〵仰いで感謝するのみであります。仍つて直ちに

然れば則ち、報じても報ずべきは大悲の佛恩、謝しても謝すべきは師長の遺德なり。

と仰せられました。

この一節は祖師聖人が正像末和讃の終に、

如來大悲の恩德は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩德も
骨をくだきても謝すべし

とたゝへられたことゝ同じ旨趣であります。

そして、かゝる知恩報德の懇念をいだくことも佛のおめぐみであります。信心の智慧によつて眼が開けたのであります。

故に觀音大士の頂上には本師彌陀を安じ、大聖慈會の寶冠には釋迦の舍利を戴きたまふ。

これは知恩報德の典型をかゝげて、われらの聖鑑となされた次第であります。

「觀音大士とは觀音菩薩のこと、その頂上の天冠には本師の彌陀の御像を安置あらせられてありまして、これは般舟讃に解したまふごとく、「慈恩を報ぜんと念ひて常に頂戴」したまふのであります。

「大聖慈尊」とは彌勒菩薩のこと、その寶冠に前佛釋迦の舍利卽ち遺骨を戴いてゐらせられるのも、また知恩報德の象徵であります。

かゝる聖鑑を仰ぐにつけても、いよ〳〵報謝せずには居れない次第であります。依つて

縱ひ、萬劫を經とも一端をも報じ難し、如かず、名願を念じて、彼の本懷に順ぜんには、今三の德を揭げて將に四輩を勸めんとおもふ、一には眞宗興行の德を讃じ、二に本願相應の德を歎じ、三に滅後利益の德を述す。伏して乞ふ、三寶哀愍納受したまへ。

と結ばれました。

大悲の佛恩は山よりもたかく、師長の遺德は海よりも深い、かゝる恩德をおもふとき、よしや萬劫といふながい〳〵時をかけても、その一端をも報謝することのできないことがわかります。

せめてものことに、名願すなはち彌陀本願の名號を信念することは、佛祖の御本懷に順ふことになりませう。紙衣の九十年をおくらせたまうた祖師聖人も、われらが本願を信じて念佛するとき始めて御滿悅あらせらるゝことであり

ませう。

覺如上人は、この式文において、祖師聖人の三つの遺德をたゝへて、「四輩」すなはち道俗男女にすゝめたいのであると、勸請あらせられた十方三世の三寶が哀愍を垂れて納受あらせられんことを念ぜられた次第であります。

第二講

眞宗興行の德

第一講の終に述べたとほり、この報恩講式には三つの德をあげて讃嘆あらせられたのでありまして、その第一段には「眞宗興行の德」をたゝへられてあります。

「眞宗」といふは淨土眞宗のこと、「興行」といふは興起流行の略であります、いま覺如上人は親鸞聖人を眞宗興行の開山として御崇敬あらせられた次第であります。親鸞聖人御自身は眞宗を敬信する愚禿の行人として謙つてゐられたのであるけれども、この開宗の御意圖のなかつたところに、却つて大道は如實に顯示され、自然の結果として眞實の一宗は開かれたのでありました。それであるから覺如上人が親鸞聖人を眞宗の開山と仰がれたことは適切であります、

聖人の御己證によつて本願の大道がうるはしく開顯せられたのでありました。

御俗姓

そこで御開山としての親鸞聖人の生涯を仰いで、眞宗の興行せる由來を述べられてあります。すなはち

第一に眞宗興行の德を讃ずといふは、俗姓は後の長岡丞相内麿公の末孫、前の皇太后宮の大進有範の息男なり。

と、まづ御俗姓をかゝげられました。

「俗姓」といふは在俗のときの姓氏をいふのである。聖人の俗姓は藤原氏で日野家の裔であります。「後長岡丞相」といふは、脚註にしるしてあるとほり内麿公であります。内麿公は藤原鎌足公五世の孫であつて、眞楯の子息であり

ます。眞楯は長岡の地に山莊をかまへて居られましたので、世人は「長岡の大臣」と呼んでゐました。そこで、その子である內麿公を「後長岡の大臣」と呼んだのであります、「丞相」とは大臣のことであります。

この後長岡丞相の「末孫」とあるは有範卿をさしたので、御傳鈔には「六代の後胤弼の宰相有國卿五代の孫」とのべてある。內麿公より十二代の孫であります。「前皇太后宮大進有範」とは有範卿のことで、役目をうへに附けて呼んでであるのであります。聖人はこの有範卿の「息男」卽ち長男として、高倉天皇の御宇、すなはち承安三年四月朔日、洛南日野の里に誕生あらせられたのであります。

蓮如上人は領解文のうちに「御開山聖人御出世の御恩」と仰せられました、まことに聖人の誕生こそ、この世において最も意味ふかい出來ごとであります、聖人の誕生なくばわれらの救はれてゆく大道は顯示しなかつたかも知れません。

山上の學修

次に聖人が家を出で山に入つて修行あらせられたことを述べられました。

幼稚の古、壯年の昔爺孃の家を出でゝ、台嶺の窓に入りたまひしより已來、慈鎭和尙を以て師範とし、顯密兩宗の敎法を習學す。蘿洞の霞の中に三諦一諦の妙理を窺ひ、草庵の月の前に瑜伽瑜祇の觀念を凝らす。鎭に明師に逢ふて大小の奧藏を傳へ、廣く諸宗を試みて甚深の義理を究む。

「幼稚の古」とはいとけない九歲の出家をいひ、「壯年の昔」とは二十九歲にして吉水に入室なさるまでのことをいふのであります。

「爺孃の家を出でゝ」とは父母の膝元をはなれて出家なされたこと、「台嶺の窓に入る」とあるは叡山の學窓に習學なされたことをいつたのであります。

出家入山は聖道の修行をなすうへにおける傳統の型であります。聖人は九歳にして家を出でゝ山に入り、それから二十年のあひだ比叡の山上において修行なされたのであります。山家の學生は十二年の修學期を定められてあるが、堂僧をつとめておはした聖人は二十年の修學をなされたのでありました。

「慈鎮和尚を以て師範とし、顯密兩宗の教法を習學す」とあるは山上の修學のありさまを描かれたのであります。

慈鎮和尚といふは大僧正慈圓の謚號である、この慈鎮和尚を師範と仰がれたのであります、そしてこの和尚は聖人の入室の師父であつたと傳說せられるのであります。

「顯密兩宗の教法」といふは天台眞言兼學の學山である比叡の學風を示されたのでありました、こゝに「顯」といふは天台の教觀、「密」といふは眞言の法門である。山上では遮那宗と止觀宗といつてゐました、遮那宗とは祕密一乘、止觀宗とは法華一乘である。聖人はこれを兼修して具に佛教々理の全局面を研鑽あらせられた次第であります。

「蘿洞の霞」とは蘿の生え繁つた洞にたちこめた春の霞をいひ、「草庵の月」とは草の庵をてらす秋の月をいふ。これは春と秋との風情を帶びさせて修辭なされたのでありまして、不斷の修道をいひあらはされたものであります。

「三諦一諦の妙理」、三諦といふは空と假と中の三諦で、一諦とは一實中道諦である。三卽一、一卽三、非三非一、諸法實相の妙理であります。

「瑜伽瑜祇の觀念」、眞言密教にとくところの六大無碍を觀ずるを瑜伽といひ、

之れを觀ずる行者を瑜祇といふのである。そして「三諦一諦の妙理を窺ふ」は止觀業であり、「瑜伽瑜祇の觀念を凝らす」は遮那業であります。

この一段の文をまとめて、和らげますと、聖人は九歳の春の頃、父母の家を出でゝ比叡の山に入られてから二十年のあひだ、慈鎭和尚を師範と仰いで、顯教の止觀業、密教の遮那業を研鑽あらせられた、春は蘿の生えしげる洞の霞のなかで、止觀業である三諦一諦の妙理をうかゞひ、秋は月澄む草庵の窓に遮那業である瑜伽瑜祇の觀念を凝らされたといふのであります。

さらに、ひろく諸宗の義理を研鑽なされたことをのべて、次に「鎭に明師に逢うて大小の奥藏を傳へ、廣く諸宗を試て甚深の義理を究む」と述べられてあります。

聖人は山上にあつて顯密の兩宗に精通なされただけでなく、南都その他をおとづれ久しいあひだ明師を歴訪して大乘小乘の奥ふかい法門の傳習をうけ、ひろく八宗にわたつて甚深の義理を研究なされたのであります。聖人は全力をうちこんで學道の修錬をおつみなされました。聖人は常行三昧堂の堂僧として眞摯に修道せられたのでありました。

聖道證し難し

然れども、色塵聲塵猿猴の情尚忙しく、愛論見論麝膠の憶彌堅し。斷惑證理、愚鈍の身成じ難く、速成覺位、末代の機覃び叵し。仍つて、出離を佛陀に誂へ、知識を神道に祈る。

眞劍に學道せられた聖人は、その眞劍な試錬によつて、聖道の證しがたきことを知られたのでありました。聖道は尊けれども、これを修顯するには自分の

根機はあまりにつたない凡夫であることに氣づかれたのでありました。

「色塵聲塵」といふは、色聲香味觸といふ六塵の略示である。「猿猴之情」とは猿猴のやうに忙がしい心情を喩示したのである。すなはち凡夫の心情は六塵の外境に誘惑されて忙がしいことを「色塵聲塵、猿猴之情、尚忙がしく」とのべられたのであります。定善義に「衆生散動の識、猿猴よりも劇し、心六塵に遍くして暫くも息むに由なし」と仰せられたと同じ風情であります。

「愛論見論」、一切の諸法に執着する心が愛論、一切の諸法に斷定の解をなすことが見論、この愛論見論が根本となつてあらゆる煩惱が生じてくるのである。

「黐膠之憶」といふはとりもちやにかわのやうに執着ののつよいおもひをいふのである。そこで、凡夫のこゝろはすべてのことに執着してこびりつき、とりもちやにかわのやうに堅いことを「愛論見論、黐膠之憶彌堅し」と仰せられたのであります。

こんな次第であるからとても聖道によつて證果をひらくことはできないのであります。これを「斷惑證理、愚鈍の身成じ難く、速成覺位、末代の機覃び叵し」と述べられました。すなはち、聖道の諸宗の惑を斷ちて理を證すること、現身のまゝ佛になることは、末代愚鈍の凡夫ではとても及びもつかないことであるといふのであります。

そこで、「出離を佛陀に誂へ、知識を神道に祈り」たまうたのでありました。すなはち生死を出離する要法を求め、善き知識に遇はんと神佛に祈請をこめられたのでありました。

惠信尼文書によると、最後に六角堂に百日の起請をこめさせられたことをしるされてあります。

吉水の轉心

降るにも照るにも、生死出づべき道はいづれに通ずるや、われをみちびきたまふ善きひとはいづれにおはしますやと、六角堂にいのりたまうたとき、靈驗ありて吉水の上人に遇ふ機縁がひらけました。

而る際、宿因多幸にして本朝念佛の元祖黒谷聖人に謁し奉り、出離の要道を問答す。授くるに淨土の一宗を以てし、示すに念佛の一行を以てす。

宿世の因縁ありがたきかぎりである、我邦における專修念佛の元祖である黒谷の法然上人にお眼にかゝる機縁がひらけ、こゝに生死を出づる要道をおたづねなされました。

そのとき、法然上人は淨土の一宗をさづけ念佛の一行を示させられたのであります。

「往生之業念佛爲本」とは法然上人の標示でありました。「專修念佛」とは法然上人の新しい識見でありました。こゝに「たゞ念佛してたすけられる」大道はひらけたのであります、道は唯一筋であります。

自信教人信

「よきひとの仰せをかふむりて信ずるのみ」、これ親鸞聖人の素直な隨順でありました。

それよりこのかた聖道難行の門を閣きて淨土易行の道に歸し、忽に自力の心を改めて、偏へに他力の願に乘じ、自行化他道綽の遺誡を

守り、專修專念善導の古風にまかす、見聞の道俗隨喜を致し、遠近の緇素皆發心す。

法然上人の仰せのまゝ、行じ難い聖道の法門をさしおきて、行じ易い淨土の大道に歸依し、たちどころに自力をすてゝ他力によつて救はれたまうたのであります。

法然上人の仰せにしたがふまゝが道綽禪師の自行化他の遺誡を守ることになる、そのまゝが善導大師の專修專念の古風にまかせることであります。

聖人一人の救はれたまうたときは萬人の救はれるときである、遠近の道俗はこれを見聞し、隨喜して、すべての人々は他力の信心をよろこぶことになりました。淨土眞宗いままさに盛なる光景であります。

東關の行化

爰に祖師西土の教文を弘めんがために、遙かに東關の斗藪を跂てたまふ。暫く常州筑波山の北の邊に逗留し、貴賤上下に對して末世相應の要法を示す、初に疑謗を成すの輩、瓦礫荊棘の如くなりしかれども遂に改悔せしむるの族、稻麻竹葦に同じ、皆邪見を翻して悉く正信を受け共に偏執を止めて還つて弟子となる。

自信教人信、聖人は自ら信じたまふと共に他人をして信ぜしめるために、行化をなされました。その行化の中心たりしところは東關であります、「こゝに祖師西土の教文を弘めんがために、遙に東關の斗藪を跂てたまふ」とのべられてあります。

「西土の教文」といふは印度西天から流傳した佛教といふことで、總じては全佛教、別してはその精華たる眞宗念佛の教をいふのであります。

「東關の斗藪」とは關東への行化である、斗藪とは頭陀行のことであります。

關東においては稻田を中心として行化なされたので、「常州筑波山の北の邊に逗留し」とのべられました。こゝにおいて、貴賤上下のへだてなく、末世の根機に相應した要法を說き示されたのであります。

ところが、初期のころは聖人の行化を疑つたり謗つたりしたものも數おほくあつたが、次第に教化が正しく行とゞいて遂には改悔して歸依するものは澤山になりました。

すべては日頃の邪見を飜して正信を獲得して、共に偏執をやめて、かへつて弟子となりました。

かの山伏辨圓のごときは、その一例であります。

因に、「瓦礫荆棘」とは「かはら、こいし、いばら、からたち」であつて、數の多いことに喩へたもの、「稻麻竹葦」これも數の多いことにたとへたものであります。

諸邦の弘通

御一生の御行化はひとり常陸にかぎつたわけではない、そこで次に諸邦に弘通せしめられたありさまをのべられました。

凡そ訓を受くるの徒衆當國に餘り、緣を結ぶの親疎諸邦に滿てり。謗法闡提の輩と雖ども、彼の教化を聞く者覺悟華鮮かに、愚癡放逸の類と雖ども其の風諫を得る者惑障雲霧る、喩へば木石の緣を待て火を生じ瓦礫

の釧を磨きて珠となすがごとし、甚深の行願不可思議なるものか。

筑波の山の見えるかぎり、東關の諸邦はことゞくその教化になびくのであ
りました。「訓を受くるの徒衆當國に餘り、緣を結ぶの親疎諸邦に滿てり」と
はこれをのべられたのであります。卽ち、聖人の教訓をうける門徒衆は當國卽
ち常陸一國にかぎらない、親しく法緣を結ぶもの近隣の諸國にみちみちるやう
な盛大なものとなりました。

「謗法闡提の輩」すなはち佛法を疑謗するもの信不具足の闡提といふともが
らであつても、ひとたび聖人の教化をきいたものは「覺悟の華」卽ちうるはし
い信心を開發するといふありさまでありました。

「愚痴放逸の類」すなはち愚痴の煩惱にとざゝれて放逸無慚のものでも「諷
諫」卽ち和やかな御さとしにふれては惑障の雲がはれて往生一定の身分となる

のでありました。

その風情は、さながら「木石の緣を待つて火を生じ、瓦礫の釧を磨きて珠と
なす」がごとくであるとたとへられた。

木と木とすれあつたら火をいだす、石と石とがうちあへば火が出る、けれど
も、すつたり、うつたりする緣がなくては、火は生じない、そこで、聖人の教
化が緣となつて、木石のやうなものにも信心の火を生ずることを「木石の緣を
待つて火を生ず」とのべられたのである。

瓦や礫のごときものも、釧すなはちやすりでみがけば珠となるやうに、あ
さましい凡夫も聖人の教化を蒙つて妙好人となることを、「瓦礫の釧を磨きて
珠と爲す」とのべられたのである。

「甚深の行願、不可思議なるものか」とは、聖人の化他の行願は甚深である、

まことに凡慮ではかり知ることのできぬところであるとたゝへられたのであります。

純正なる行化

方に今、佛道修行の要義區なりといへども、他力眞宗の興行はすなはち今師の知識よりおこり、專修正行の繁昌は亦遺弟の念力より成ず、流れを酌んで本源を尋ぬるに偏へに是れ祖師の德なり、須らく佛號を稱して師恩を報ずべし。

覺如上人の御時代には、專修念佛の敎團にも異流は區々にわかれて居りました。そこで、念佛を勸化するものはあるけれども、その純な正意をあらはすものはひとりわが聖人である。そこで、他力眞宗が正しく興隆したのは「今師の

知識」すなはち聖人よりおこり、專修正行の繁昌は「遺弟の念力」より成ずる。かゝる興行もその本源をたづぬれば、ひとへに祖師聖人の德であります。須らく佛號を稱へて、この師恩を報ぜねばなりませぬ。

第三講

眞實は稀なり

式には三段の德をかゝげてあります。第二講には「第一の眞宗興行の德を讃ず」の一段を窺ひましたから、つゞいて第二段を窺ひます。

第二に本願相應の德を歎ずといふは、念佛修行の人これ多しと雖も、專修專念の輩甚だ稀なり。或は自性唯心に沈んで、徒らに淨土の眞證を貶しめ、或は定散の自心に迷ふて、宛も金剛の眞信に暗し。

「第二に本願相應の德を歎ず」とあるは三段の歎德のうち第二段を標示なされたのであります。この一段は親鸞聖人が眞宗を興行なされたことは、彌陀の本願に相應するといふことを讃嘆なされたのであります。

念佛は最も久しい實踐法として普及されたものであります、殊に、わが國は念佛に緣のふかい國土でありまして、古來、念佛を修行した人々はまことに夥しいことであります。ところが、せつかく念佛をとなへながら、佛の本願に相應するものは至つて稀でありました、この點において親鸞聖人が本願に相應した眞宗を興隆なされたことは讃嘆すべきことであります。そこで「念佛修行の人これ多しと雖も專修專念の輩甚だ稀なり」とのべ、聖人はその稀なお方であつたことをたゝへられたのであります。

こゝに「專修專念」とあるはどんなことかといふに、「專修」といふは本願の御名をふたごゝろなく稱へること、「專念」といふは一向專修のことで、餘善をかへりみず、他佛にうつるこゝろのないことであります。これ彌陀の本願にかなふ純な念佛修行でありまして、法然上人の專修念佛をうけついで正信念佛をみがきあげられた親鸞聖人の正しい開顯を示されたものであります。眞實

の念佛修行、念佛の如實修行は淨土眞宗において、あらはれたのであります。

そして、念佛を修行しながら、大多數の人々が本願に相應しないありさまを對比せしめられたのが、「或は自性唯心に沈んで徒らに淨土の眞證を貶しめ、或は定散の自心に迷ふて、宛も金剛の眞信に暗し」といふ一節であります。

こゝには異執の代表的なものとして「自性唯心に沈む」ものと、「定散の自心に迷ふ」ものとをあげられました。

「自性唯心」といふことは、成佛の法は自性すなはち自體をさとることであつて、淨土は唯心の所變であるとなすもの、いはゆる唯心の彌陀、己身の淨土と談ずる聖道諸家の安心である。かゝる主觀に沈滯してとゞまるために、西方の淨土に往生して涅槃の妙果をさとるといふ客觀的な念佛往生の宗旨を方便であると貶斥するやうになるのでありました。

また、「定散の自心」といふは慮を息めて心を凝す定善や、惡を廢して善を修する散善をふりむけて往生せんといふ自力のはからひである。かゝる自力のはからひに迷ふために、他力廻向の金剛の信心にくらくして、正しい信心におちつけないのであります。

かゝる人々は、いかに念佛しても素純に聖化されないのであります。念佛しないで踏みまどふ人々もいたましいけれども、せつかく念佛しながら、佛とひとつになりきれない人々はさらにいたましいことであります。

聖人の體驗

かゝるかなしい經緯のなかに、わが聖人が正しく本願を開顯なさつたことは、まことにありがたいことであります。

しかるに、祖師聖人は至心信樂己を忘れて、速かに無行不成の願海に歸し、憶念稱名精あつて、鎭へに不斷無邊の光益に關かる。身に厥の證理を彰はし、人彼の奇特を看ること、勝計すべからず。

この一節は、祖師聖人の如實の信行をたゝへて、安心も報謝も本願に相應なさつたありさまを示されたのであります。

このうち「至心信樂、己を忘れて速かに無行不成の願海に歸す」といふは、他力廻向の信心を云ひあらはされたのであります。「至心信樂」とは眞實の信心である。至心は眞實であつて、佛心のこと、佛の眞實心が衆生に廻向されて信樂となる、すなはち他力廻向の信心である。「信ぜよ、然らば救はん」といふよりも、「信じさせて救はん」といふのが本願の旨趣であります。

他力廻向の信心であるから「己を忘れて」本願に歸入すとのべられたのである。「己を忘れて」といふは自力のはからひをはなれて、本願におまかせすることであります。

なほ「無行不成」といふは「行として成ぜざるなし」といふことで、本願の名號には萬行が圓かに成就されてあることを「無行不成の願海」と申されたのである。かくのごとく本願他力にはわれらの救はれる行がすべて成就されてあるからわれらは自力のはからひをうちすて己を忘れて救はれるのであります。

次に「憶念稱名精あつて鎭へに不斷無邊の光益に關かる」といふは、信心の相續する念佛生活の力强さとその利益をたゝへられたのであります。

信心が相續するとき意業になれて憶持不忘の憶念となり、口業にあらはれて稱名となるのである。そして、これは內に充たされた生命の發露であるから活々して力强いありさまを示して「憶念稱名精あり」とのべられたのであります

す。

次に念佛の行者は光明に攝護される利益がある。この光明は時間的には不斷であり、空間的には無邊であるから、これを「不斷無邊の光益」とのべられたのであります。なほ「鎭へに」といふは「いつまでも」といふことで、臨終まで末とほりたる照護をのべたものであります。

かゝる信行をめぐまれ光明に攝取されて、御くらしになつた聖人は、おのづとその體得せられた心境を生活に顯彰なされたことである、これを「身に厥の證理を彰はし」とのべられたのであります。また、周圍の人々も面のあたり聖人のふしぎな殊勝な相を拜見したことは、一々あげてかぞへることができない程であるといふことを「人彼の奇特を看ること、勝計すべからず」と述べられたのであります。

この一節は聖人の自行の德をたゝへられたのでありました。

化他の德風

次に、聖人の化他の德をたゝへて左のとほりのべられました。

しかのみならず、來問の貴賤に對して專ら他力易往の要路を示し、面謁の道俗を誘へて、偏に善惡凡夫の生因を明す。

聖人がすべての人々を勸化せられるにあたつては正しく本願の大道を顯示なされました。

「他力易往の要路」といふは、佛にすくはれて、淨土に往生し易い肝要の道路といふことで、つまり、念佛往生の大道を意味するのである。この念佛往生のことわりを、「來問の貴賤」すなはち道を求めて來り問ふ身分の高いものにも

身分のひくいものにも、へだてなくねんごろにお示しになつたといふのであります。

「善惡凡夫の生因」といふことは、一切の善惡の凡夫が、淨土に往生することができるのは大願業力を信ずるにあるといふことで、凡夫往生のことわりをあきらかにして、「面謁の道俗」すなはち御遇ひなされた出家の方にも、在家の方にも一樣におさとしなされ誘導なされたのであります。

宗師の明證

かくのごとき、聖人の自行化他の生活が本願に相應することを證成するために、淨土教の權威として仰がれたまふ善導大師の御詞を引抄せられました。

このゆゑに、善導大師のいはく、今の時の有緣相勸めて誓つて淨土に生ぜしむるときは、則ちこれ諸佛本願の意に稱ふなり、又曰く、大悲傳普化眞成報佛恩と。然れば祖師聖人、金剛の信心を發起して、自身の生因を定得し、本願の名號を流行して、衆機の往生を助成す、豈本願相應の德にあらずや、擧ろ、佛恩報盡の勤にあらずや。

こゝに善導大師の文をふたつ引證されてある、第一は觀經疏定善義の文でありまして、「今の時の有緣相勸めて、誓つて淨土に生ぜしむるときは、則ちこれ諸佛本願の意に稱ふなり」と、これは今の時の有緣のものがお互に勸め合うて淨土へ往生するやうにすることは、諸佛の思召にかなふことであるといふ意味であります。

第二は往生禮讃の文でありまして、「大悲傳普化、眞成報佛恩」とは如來の大悲を傳へて普く人々を化益することは眞成に佛恩を報ずるつとめであるとい

ふ文意であります。因に「眞成」とは唐代の俗語で「まことに」といふほどの意味をもつのであります。

かゝる證文によつても、あきらかに窺はれるやうに、祖師聖人が「金剛信心」すなはち、めぐまれた確信を發起して、たしかに自身の往生を正因といたゞいて、自行を成就なされたばかりでなく、「本願の名號」すなはち救ひの法を世に弘めて、あらゆる人々の往生の大益を助成して、化他にいそしみたまうたことは、「豈本願相應の德にあらずや、寧ろ佛恩報盡の勤にあらずや。」これ實に本願の聖意にかなふ尊い生き方ではないか、佛恩に報謝するつとめではないかと讃へられた一段であります。

御持言の感戴

次には、聖人の御持言を頂戴して、覺如上人はその慶喜の心情を述べられました。いはく

又、恒に門徒に語て曰く、信謗共に因と爲て、同じく往生淨土の緣を成ずと。誠なる哉斯の言、疑ふ者は必ず信を執り、謗る者は遂に情を飜へす。實に是れ佛意相應の化導、抑も又勝利廣大の知識なり、惡時惡世界の今、常沒常流轉の族、若し聖人の勸化を受たてまつらずんば爭でか、無上の大利を悟らん、既に一聲稱念の利劍を揮ふて、忽に無明果業の苦因を截り忝なくも三佛菩提の願船に乘じて、將に涅槃常樂の彼岸に到りなんとす。

聖人のつねに門徒に語られた御持言「信謗共に因と爲て、同じく往生淨土の緣を成ず」といふことをお引きなされてある。

これは御本典の結尾に「信順を因となし、疑謗を縁と爲す」と仰せられたことゝ符節を合するもので、眞宗の法門を信ずるものもあれば謗るものもあるが、共にそれが淨土に往生する因縁となるのであるといふ意味であります。いかにも、深い攝化の妙趣を會得された御持言であります。

この御持言をいたゞいて、覺如上人は「誠なるかな斯の言」とたゝへ、疑ふものも必ず信心を決定する身となり、謗るものも遂に情をひるがへして歸伏することになつた。これ全く聖人の化導が佛意に相應してゐるからのことであつて、さらに聖人は勝れた偉大な指導者であらせられる所爲であると感歎なされたのであります。

「惡時惡世界の今、常沒常流轉の族、若し聖人の勸化を受たてまつらずんば、爭でか無上の大利を悟らん」更に惡い時節であり惡い世界といはれて荒みきつた今の時である、常に沒し常に流轉してゐる身である。若し、手强い聖人の勸化をうけることがなかつたら、どうしてこの上もないすぐれた名號をいたゞいて悟ることができようと慶喜せられてあります。

終に「既に一聲稱念の利劍を揮ふて、忽に無明果業の苦因を截る」とは、名號を信行して迷をはなれることをよろこばれたものであります。彌陀の名號を生死のきづなをたちきる利劍にたとへられてあることにもとづいて、名號を信じ稱へることを「一聲稱念の利劍」と申されたのである。また「無明果業の苦因」とは無明は惑、果は苦、業因は業、つまり、惑と業と苦との迷ひをいふのであります。一聲の稱名によつて、この迷の因をたちきることを「無明果業の苦因を截る」と示されたのであります。

また「忝なくも三佛菩提の願船に乘じて、將に涅槃常樂の彼岸に到りなん

とす」とは、本願の救ひをたゝへられたものであります。「三佛菩提の願船」とは、彌陀の本願のことであります。三佛は法報化の三身のこと、佛の三身を三種の佛菩提といふのでありまして、こゝでは彌陀如來のことであります。この彌陀如來の本願に乗托して、涅槃の常樂我淨のさとりをひらくことは忝ないことであるとの感銘をのべられたのであります。

懇切なる勸信

終に佛祖の慈恩を感荷して、信心の生活に入るべきことをすゝめられて結歎せられました。

彌陀難思の本誓、釋迦慇懃の附屬、仰がずんばあるべからず。諸佛誠實の證明、祖師矜哀の引入、憑まずんばあるべからず。茲に因りて、各本願を持ち名號を唱へて、彌、二尊の悲懷に協ひ、佛恩を戴き、師德を荷ひ、特に一心の懇念を呈はすべし。

「彌陀難思の本誓」といふはありがたい彌陀の本願のこと。

「釋迦慇懃の付屬」といふは、ねんごろな釋迦の附屬せられた名號のこと。

「諸佛誠實の證明」といふは諸佛のまごゝろこめての證誠のこと。

「祖師矜哀の引入」といふは宗祖聖人のあはれみぶかいお手びきのこと。

この彌陀釋迦諸佛の佛恩と祖師聖人の師德をあげて、われらははからひをはなれて仰信すべく依憑すべきことをのべ、われらは本願を執持し名號をとなへて、一心の懇念を呈はさねばならぬと他力のうるはしい信心をおすゝめなされたのであります。

第四講

第二講に第一の「眞宗興行の德」をたゝへ、第三講に「本願相應の德」をたゝへたから、いま終に「滅後利益の德」をたゝへて講話を終ります。

第三に滅後利益の德を述すといふは、釋尊は教網を三界に覆ふて、猶末世苦海の群類を濟ひ、今師は法雨を四輩に灑ぎて、遠く常沒濁亂の遺弟を濕す。

「第三に滅後利益の德を述す」とあるは、式の三段のうちの第三段を標示なされたものであります。「滅後利益」といふは入滅の後にもなほ他人を利益なさる偉德をたゝへたのであります。卽ち、親鸞聖人が御往生なされたのち、その御遺德の大きなことを述べられる一段であります。

多くの人物は存命のうちには相當に世間から認められもするが、ひとたび死んでしまふと火の消えたやうなもので、漸次、世人からも忘れられるものであ
る。若し、死んでから愈々その光を增す人格にはそこに滅びない生命があること
を知らねばなりませぬ。聖人は滅後において、いよいよその遺德が景仰せら
れることになり、それによつて多くの群生は救はれることになりました。聖人
こそ永遠の恩師であり、不滅の善知識であらせられます。

「釋尊は教網を三界に覆ふて、猶末世苦海の群類を濟ひ」とは、聖人の遺德をたゝへる背景として、教主釋尊の恩德をたゝへられたのであります。

「教網」とは教を網にたとへられたもので、佛教は苦海の衆生を救ふ網であるとの意味である。「三界」とは欲界、色界、無色界のことで、迷界をいふのである。そこで釋尊は佛教の網をもつて迷ひの世界を覆うてくださる。佛教の網

はひろいけれども、その綱要は彌陀の本願である、この本願は末世相應の聖法であることを示して、苦界すなはち、迷の世界に久しくたゞようてゐるわれらを救うてくださるのであります。

「今師は法雨を四輩に灑ぎて、遠く常沒濁亂の遺弟を濕す」とは、正しく聖人の遺德をたゝへられたものであります。「今師」とは親鸞聖人のこと。「法雨」とは佛法を雨にたとへられたもの。「四輩」とは比丘、比丘尼、優婆塞・優婆夷で出家の男女と在家の男女とをいふ、つまり、一切の人々のことである。そこで、親鸞聖人は眞宗を興行して、佛法の慈雨を一切の人々にそゝぎ、とほく滅後の今日まで、迷ひをくりかへしてゐる五濁に亂れた下根の遺弟を御化導くださることをたゝへられたのであります。

御一代の德化

滅後の遺德をたゝへる根元として、御在世の教化をたゝへられていはく、

彼の在世を謂へば則ち九十歳、顯宗密教鑽仰せずといふことなし。その行化を訪へば亦六十年自利利他滿足せずと云ふことなし。在家出家の四部、群集すること盛なる市に異ならず、大乘小乘の三輩、歸伏すること風に靡く草の如し。

聖人がまことに希有の御長命であつて、九十年の御在世でありました。その御一生のあひだには顯密の二教すなはち一代佛教を學んで、及び難きに及び、入り難きに入つて、その奥義を研究あらせられました。その御化導についてみると二十九歳にして吉水に入室なされてから凡そ六十年のあひだといふものは

自ら信じ他を信ぜしめて十分に満足なされました。在家の男女も出家の男女もいはゆる四部の衆が聖人のお膝元を慕うてあつまることは、さながら繁盛する市場のやうな光景でありました。大乘小乘の上中下の三輩、すべての階程の人々もその徳に歸伏するありさまは、さながら風になびく草のやうな風情でありました。

「風に靡く草の如し」とあるは、論語の「君子の徳は風なり、小人の徳は草なり、草に風を上れば必ず偃す」とあることによつて造語せられたもので、徳化の及ぶありさまをたとへられるのであります。

御往生の素懐

經には則ち華洛に還りて、草庵を占たまふ。然る間、去弘長第二壬戌黄鐘二十八日、前念命終の業成を彰にして、後念即生の素懐を遂たまふ。

この一節は聖人の歸洛と往生を叙べたものであります。聖人は御晩年に「華洛」すなはち京都へかへられて、「草菴」に佗居なされたのでありました。「扶風憑翊ところ〴〵の落花かな」と句佛上人の吟ぜられたやうに、處々に移住なされたのでありました。

そのうちに、弘長二年十一月二十八日に御往生なされました。こゝに「黄鐘」といふは十一月のことでこれは十二律呂を配當したものであります。十二律呂といふは大簇、夾鐘、姑洗、中呂、黐賓、林鐘、夷則、南呂、無射、應鐘、黄鐘、太呂のことで、これを十二月に配當したので、もとは禮記月令に出てゐるのであります。

なほ、「前念命終」といひ「後念卽生」といふは、往生禮讃や愚禿鈔によられたもので、信の一念をいひあらはしたものである。同一念に前後を分つべきではないけれども、受法と得益を分別するためにしばらく前念と後念とわけられたのである。信心をいたゞけば自力の迷心の盡きるを前念命終といひ、正定聚に入るを後念卽生といふのである。「前念命終の業成」とは信の一念に迷心つきて往生の業事成辨するをいひ、「後念卽生の素懷」とは信の一念に正定聚に住する故に、かならず往生の本懷をとげることをいふのであります。

これ臨終來迎にえらんで、平生業成の信心のあらはれである尊い御往生の光景をたゝへたのであります。

名殘は盡きじ

あゝその人去つて、始めてその人に遇ふ、これ人情であります。

嗟呼、禪容は隱れて何にか在す、給仕を數十回の月に隔つ、遺訓絕えて幾の程ぞ、舊跡を三十餘年の霜に慕ふ。

「禪容」とは聖人の禪かな御姿のこと。「遺訓」とは聖人の親しい教訓のことである。

あゝ聖人の禪かな容姿はいま何處におはすぞ。滅後に生れおくれた身は、給仕を申上げんにも、數十回の月をへだてゝゐる。聖人の御口ずからの訓言をきけなくなつて久しいことである。今は三十年の月日はながれたと切々として追慕の懇念をさゝげられたことであります。

敬慕の至情

聖人は「弟子一人ももたず」と仰せられた。しかし、弟子は最も多く集りました。

彼の遺恩を重んずる門葉、其身命を輕んずる後昆、毎年を論ぜず遠絶を遠しとせず、境關千里の雲を凌ぎて、奥州より歩みを運び、隴道萬程の日を送りて、諸國より群詣す、廟堂に跪きて涙を拭ひ、遺骨を拜して腸を斷つ、入滅年遥なりと雖も往詣擧て絶えず。

「門葉」といふは門徒のこと、聖人は根本であり門徒は枝葉であるから門葉といふのである。「後昆」とはのち〳〵のもので、遺弟をいふのである。かゝる門徒や遺弟たちは、聖人の遺恩を重んじ、その報恩のためには身命をかへりみず、年々、遠いみちをも遠しとせず、境關千里の雲を凌いで、はるかに奥州から歩を運ぶものもあれば、隴道萬程の日をおくつて、諸國から群をなして詣るものもある。いづれもみな、大谷の廟堂にひざまづいて聖人の御在世のことどもを偲んでは涙を拭ひ、御遺骨を拜んでは名殘を惜んで腸を斷つといふありさまであります。

御入滅のそのときから今日まで、歳月は遠くへだたつてゐるけれども、參詣するものは絶えないといふありさまであると遺弟の追慕するありさまを叙べられたのであります。

なほ、「境關千里の雲を凌ぎ」と「隴道萬程の日を送りて」とは、對句になつて居る。

「境關」とは國境の關所のこと、「千里の雲を凌ぎ」とは雲茫々たる遠い旅路を越えてくることであります。また「隴道」といふは山坂の道のこと、「萬程の日」といふは萬日の日程すなはち長い日數がかゝるといふことであります。

御影像と御遺訓

眞實は永遠にほろびないのであります、時光は流れて眞實はいよ〳〵光るのであります。

哀なる哉、恩顔は寂滅の烟に化すと雖も、眞影を眼前に留む。悲しき哉、德音は無常の風に隔たると雖も、實語を耳の底に貽す。撰み置きたまふ所の書籍、萬人之を披きて、多く西方の眞門に入る。弘通したまふ所の教行、遺弟之を勸めて、廣く片域の群萠を利す。凡そ厥一流の繁昌は殆んど在世に超過せり。

この一節は眞影を留め、教訓を遺された滅後の德化をたゝへられたものであります。

「哀なる哉、恩顔は寂滅の烟に化すと雖も眞影を眼前に留む」といふのは、恩顔卽ち聖人の御顔は寂滅の煙すなはち荼毘一片の煙に化したことはやるせないことであるが、ありがたいことには正眞の影像をとゞめさせられたので、髣髴として拜むことができるといふことであります。

「悲しき哉、德音は無常の風に隔たると雖も、實語を耳の底に貽す」といふは、德音すなはち聖人の教化の御音聲は無常の風にへだたつて聞くことができないことは悲しいことであるが、實語すなはち眞實をこめての御法語は今なほ耳の底にのこつてゐるので、ありがたいことであります。

「撰み置きたまふところの書籍、萬人之を披きて多く西方の眞門に入る」。御在世のうちに御撰述あらせられた數々の御聖教があるので、たくさんの人々はこれを拜見して、多くのものが西方淨土へ往生する眞實の門卽ち念佛往生の本

願に歸入することになつたといふのであります。

「弘通したまふところの教行、遺弟これを勸めて、廣く片州の群萌を利す」。

御一代に弘通あらせられた教行、すなはち唯信特達の道は、遺弟たちが勸めてひろく日本全土の人々を利益することになつたといふのであります。

「凡そ厥一流の繁昌は、殆ど世に超過せり」。聖人の御流卽ち淨土眞宗は、歳月を經るに從つていよ〳〵光彩を添へることになつて、その繁昌は世間に超えずぐれて並ぶものゝないありさまである、といふ感嘆であります。

本地の聖容

最後に聖人の本地を仰いで、非凡な高德をたゝへられました。

倩平生の化導を案じ、閑に當時の得益を憶ふに祖師聖人は直也人に非ず。則ち是れ權化の再誕なり。已に彌陀如來の應現と稱し、亦は曇鸞和尚の後身と號す。皆な是れ夢の中に告を得、幻の前に瑞を視し故なり。況んや、自ら名のりて親鸞と曰ふ。測り知ぬ、曇鸞の化現なりと云ふことを。

「倩平生の化導を案じ、閑に當時の得益を憶ふに祖師聖人は直也人に非ず、これ權化の再誕なり」。よく〳〵聖人の毎日々々の御化導をかんがへ、ところしづかに御在世のときにあらはされた利益を思ひ浮べてみると、聖人は平凡なお方ではない、全く聖者がかりに姿をかへて誕生あらせられた生れかはりである、卽ち權化の再現であるとの感激をのべたものであります。

「已に彌陀如來の應現と稱し、亦は曇鸞和尚の後身と號す。皆な是れ夢の中に告を得、心の前に瑞を視し故なり」。これは權化の再誕といふことを具體的に

示されたのであります、卽ち、御在世のときから、聖人は彌陀如來が凡夫にわかりやすく姿をかへて現れたまうたので、その本地は彌陀如來であらせられるといふことをお弟子たちは夢幻のうちに感得したことである。

尙ほまた曇鸞和尙の後身すなはち生れかはりであらせられると稱せられた次第である。これについての傳說は書いてないけれども、これは覺如上人の傳聞せられたことであらう。「況んや自ら名のりて親鸞とのたまふ、測り知ぬ、曇鸞の化現なりといふことを」と記されたとほり、親鸞といふ御名告は、天親と曇鸞の御名前を一字宛頂かれたもので、他力廻向の敎義はこの天親菩薩、殊に曇鸞和尙をうけつがれたのであるから、曇鸞和尙のかりに姿をかへてあらはれたまうたことが窺はれるといふ意味であります。

聖鑒を仰いで

式文を結ぶにあたつて聖鑒を仰いで、所願をのべ、以て有緣に信心を勸めたまうていはく、

然れば則ち、聖人、修習念佛の故に、往生極樂の故に、宿命通を以て知恩報德の志を鑑み、方便力を以て有緣無緣の機を導きたまはん。願くは師弟芳契の宿因に依つて、必ず最初引接の利益を垂れ給へ。仍て各他力に歸して佛號を唱へよ。

聖人は念佛を修習せられたことであるから極樂へ往生あらせられた。極樂へ往生せられたことであるから六神通をさとらせられて宿命通を得て、さきの世のことが一眼に照覽あらせられる。そこでこの法筵につらなつて遺弟たちが知

恩報德の志をさゝげることを鑒察してゐられる。そして、己を忘れて一切を救はんといふ方便力をあらはして有縁のものはいふまでもなく、無縁のものをもすてぬ大悲心によつて導いてくださるにちがひない。仰ぎ願はくは、師匠と仰ぎ弟子とかしづいた芳しい契の宿因によつて、必ずやまづ最初に引接の利益を垂れたまふことを期待するのである。來會の一同は他力の本願におまかせをして、たゞ念佛申さねばなりませぬといふ切々たる思念を披瀝なされたことであります。

後のことば

昭和十三年の一月、ふるさとの自坊において、御正忌の會座に讃嘆したものの要旨であります。

のちに、これを「道」に連載したのであるが、こゝに一冊にまとめた次第であります。實際はもつと、くわしく且つ分りやすく讃嘆したのでもあるから、もつと筆を加へたいともおもうたが、忙しい夏講の旅路において寸閑をもつて編んだので、「道」にのせたまゝにすこしばかり加筆するにとゞめました。

昭和十三年八月上旬、越前味眞野出雲路派本山毫攝寺の夏講の餘閑、これを編んだ。蟬時雨に七堂伽藍は暮れて行く

梅原眞隆識

昭和十三年八月廿五日印刷
昭和十三年八月三十日發行

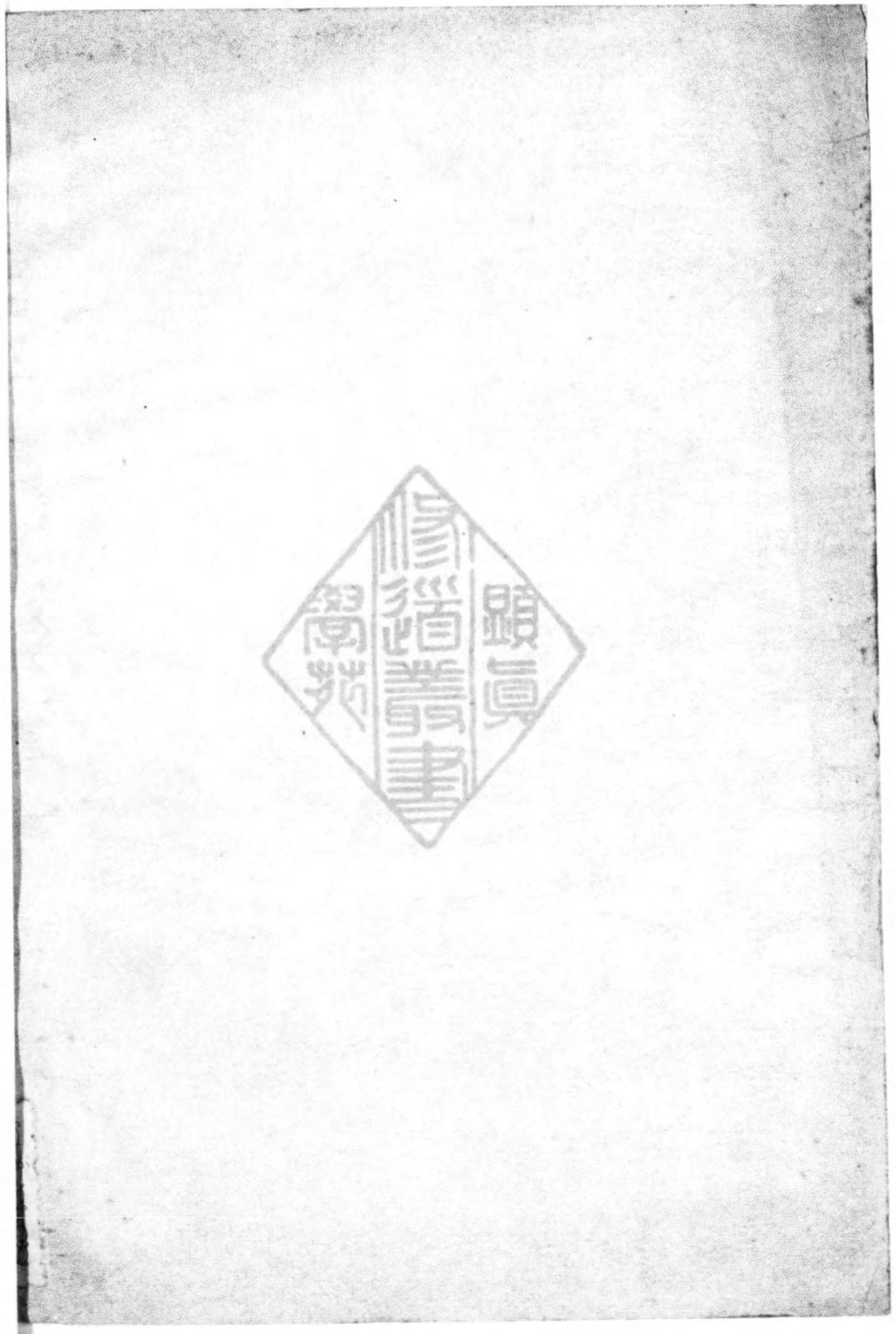
定價五拾錢
郵稅六錢

著者　梅原眞隆
京都市上京區小山西元町四一
顯眞學苑出版部代表

發行者　佐藤大心
京都市壬生川通五條下ル

印刷所　同朋舍

不許複製

發行所　京都市上京區小山西元町四一
顯眞學苑出版部
電話西陣四六六八番
振替京都七七〇一番

終